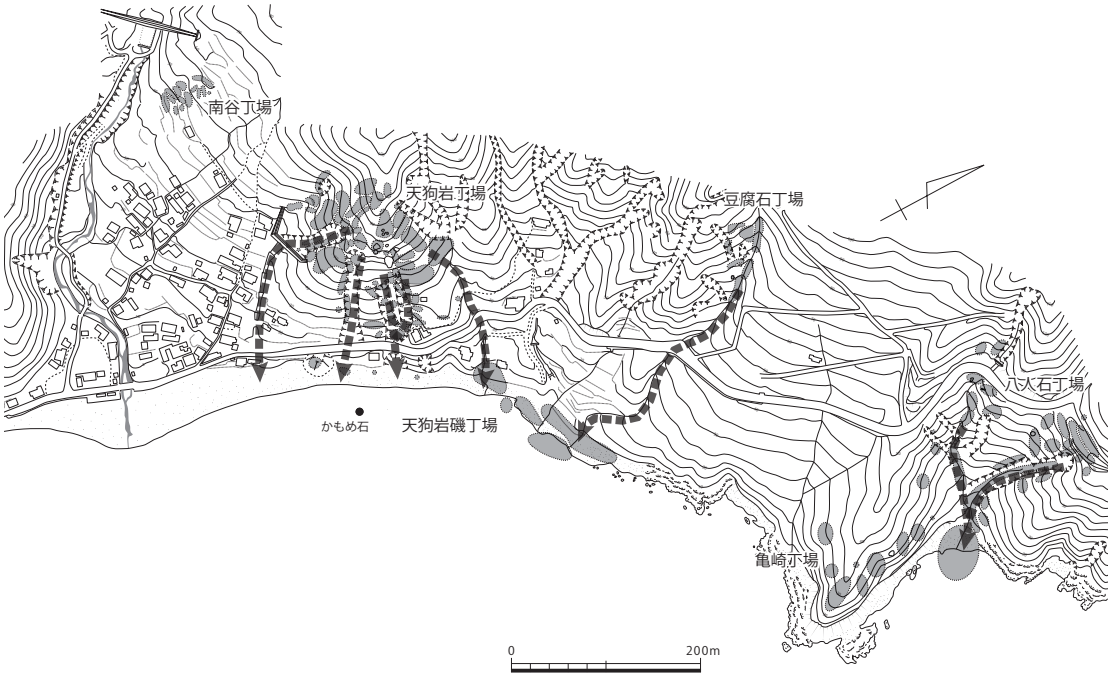
第4章　考　察

1．小豆島石丁場跡（岩谷石切場）の石材搬出ルート

八人石丁場における石材の搬出には、①山中での石の切り出し、②谷状地形を利用した海岸部までの運搬、③船積みの工程がある。今回の調査で明らかとなったように、石丁場の海岸部には、船積みを行うまでの一定期間仮置きされた規格石材が並ぶ。石材の一時置き状況は、岡山県前島の前島石切丁場で整然と並べられていたように[(1)]、本調査地でも一定の単位でまとめられていた可能性が高い。つまり、八人石丁場では石材搬出にかかる一連の工程を一つのユニットとして作業を進めており、切り出し途中の石材や運搬途中のもの、そして、海岸部に仮置きされたものといった各工程の様子を見ることができる。

では、岩谷石切丁場全体に目を向けるとどうであろうか。岩谷には大きく５ヶ所の石切丁場があり、そこから谷状の地形や河川が海岸部まで繋がっていることがわかる。土砂災害等による影響を考慮したとしても、谷筋地形から見て、おおむねこのルートを石材搬出のための石曳き道とした可能性は高い。そのため、山中にある天狗岩丁場、南谷丁場、豆腐石丁場の石材は、全てが同じ海岸部に集まるようになる。

特に、天狗岩丁場と天狗岩磯丁場の関係は、矢穴石の分布状況やそこからのびる谷地形などの位置関係から、４ヶ所のルートで搬出されたことが想定される。現在、海岸部における石材の分布は、２ヶ所に矢穴石等のまとまりを窺うのみであるが、北側のまとまりは昭和53年（1978）の土砂崩れ堆積の影響が著しい。一方、南側のまとまりは、かもめ石と呼ばれる石杭を立てた巨石の周辺の海岸から海中に石材の分布を確認できる。石材は、現在の干



小豆島石丁場（岩谷石切場）の石材搬出ルート

潮時に顔を出す位置に南北に長く分布し、この石材群と海岸から約 25 m付近に位置するかもめ石までの間の海中にのみ確認できる。また、海岸とかもめ石との中間には重なった石材がある。一見すると海岸から重なった石材、かもめ石が船積みにおける一連の構造物ではないかとも考えられるが、詳細は不明である。ただし、かもめ石より海側は一段と深くなっていることも踏まえると、かもめ石をもやいとした船積みに関連する遺構の可能性もある。[(2)]

天狗岩丁場海岸部（磯丁場）の規模は、天狗岩丁場海岸部は南北 250 mの範囲に亘る。ところが、かもめ石付近の石材のまとまりは、南北 25 m、東西 30 mの範囲に限られ、一つの谷筋で搬出される石材の船積みは、石材の仮置きスペースを含め、この程度の規模であった可能性がある。一方、八人石丁場海岸部の規模は、南北 50 m、東西 40 mであり、規格石材は南北 25 m、東西 30 mに集まる。船積みに関係するような遺構はわかっていないが、海岸部の規模から推定すれば、２隻程度の船を着岸させることは可能であろう。

このように、小豆島石丁場跡（岩谷石切場）においては、露頭する花崗岩が海上から確認できる岩山があり、それに加え、船を着岸して仮置きした石材を容易に搬出可能な海岸がセットである地点を対象に採石を展開したと考えられる。

（１）渡辺武ほか「徳川期大坂城石垣築城時の岡山県牛窓町前島石切丁場遺跡調査」『土木史研究』17、1997。

（２）小豆島町『国指定史跡大坂城石垣石切丁場跡 天狗岩丁場 探訪マップ』を参考に作成。

本調査は小豆島町と同志社大学文化遺産情報科学研究センターの共同プロジェクトとして平成 24 年８月から開始した調査の一部である。天狗岩磯丁場（かもめ石付近）の石材分布図〔PL7〕は、高田祐一、福家恭、広瀬侑紀、望月悠佑、有吉康徳が作成した。

２．残置された石材および引き揚げの事例

大坂城再築に関する石材調達において、川岸・海岸に残置された石材や海・川揚がりの残石の事例がある。類例を整理する。

（１）川岸・海岸に残置された石材

①京都府木津川の事例

京都府木津川には、藤堂家が大坂城再築のために切り出した石材が残置されている。『元和九年拾月七日賀茂残り石之帳』と石材を分析した高橋美久二氏によれば、第一期普請の際に切り出し、元和９年に残石を調査し、記録化と石材へ日付・サイズの打刻が行われたとのことである。[(1)] 京都府木津川市山城町平尾の開橋の東岸南側、木津川市加茂町大野小字山際の赤田川合流点に石材が現存している。